川村学園女子大学研究紀要　第15巻　第1号　55頁―68頁　2004年

社会的迷惑行為に関する研究[1)2)]

松　井　　洋*

A Study of Social Annoyance

MATSUI, Hiroshi

要　旨

社会的迷惑行為について，以下のように調査を行った。

調査1．では，日本，アメリカ，トルコの中高生を対象におこなった調査内容について，非行許容性，道徳意識，恥意識などを含めた因子分析を行った結果は，社会的迷惑行為に対する中高生の意識は，非行許容性，道徳意識，恥意識と同一の意識ではなく，これらからある程度独立した意識であることを示していた。他方，社会的迷惑行為に対する意識は，日本では自律的な恥意識と，アメリカでは道徳意識と関係が深いことがわかった。

社会的迷惑行為に対する態度を3カ国の間で比較すると，三カ国の中で，アメリカの中高生は社会的迷惑行為について，もっとも，「悪い」，「恥ずかしい」と感じるブレーキが弱い。反対にトルコはもっとも抑制的で，多くの社会的迷惑行為を「悪い」または「恥ずかしい」と感じる傾向がある。日本の中高生は，アメリカと比べると，社会的迷惑行為に厳しいが，トルコほどではない。また，社会的迷惑行為についての態度には国による違いがある。

調査2．では，日本の中学生と大学生を対象に調査を行った。まず，社会的迷惑行為についての経験と恥意識について因子分析を行った結果，社会的迷惑行為はいくつかの種類に分けることができ，また，恥の意識が社会的迷惑行為を抑制し得るということがわかった。

キーワード：社会的迷惑行為，国際比較，恥意識

*教授　社会心理学

松　井　　洋

Ⅰ．目　　的

近年，日本では犯罪が増加し，凶悪化している。また，少年の非行も多発し，凶悪な少年犯罪が増加している。著者らは，このような状況の原因を探るために，これまで，中学生・高校生の価値観，愛他性，道徳意識，友人関係、親子関係等について，国際比較調査，経年比較調査を行ってきた。その結果，日本の若者は，努力が嫌い，とくに性に関することなど非行に対して許容的など，他の国の若者と比べたとき，かなり顕著な問題のある傾向がある事，また，そのような傾向は，この十数年ほどの間に悪化しつつあると言い得る結果を得ている（松井 1991, 1997, 1998, 1999, 2000, 2001, 2002, 2003, 松井他 1995, 1998, 中里・松井 1993, 1996, 1998, 1999, 2003 他）。そして，これらのことから，現代日本の若者の非行の問題の背後には，若者一般の生き方や考え方の歪みがあると考えるに至った。

他方，日本の若者の行動を見ると，犯罪にも非行にも含まれないが，困った行動もある。例えば，電車の中で化粧をしたり，繁華街で道にべったり座り込んでいたり，ところかまわずゴミを捨てたりするような行動である。このように，犯罪，違法行為ではないが，他者が迷惑や，不快を感じるような行為を社会的迷惑行為という。社会的迷惑行為については，吉田ら（1999），石田ら（2000）の研究があるが，現在まであまり研究されておらず，他の特性との関係もよくわかってはいない。著者らは，前述のように，日本の若者の非行的な態度を第一の問題として研究を行ってきた。しかし，社会的迷惑行為に対する態度もまた，若者の生き方考え方の歪みを反映するとも考えられる。

本研究は，社会的迷惑行為に対する若者の態度が，これまで著者らが問題としてきた，非行的態度，道徳意識，恥意識などとどのような関係にあるのか，社会的迷惑行為の各々について，するしない，良い悪いなど，どのような態度を示すのか，中学生と大学生とはこのような態度に違いがあるかどうかを検討することが目的である。

Ⅱ．調　査 1.

1. 目的

社会的迷惑行為に対する若者の態度が，これまで著者らが問題としてきた，非行的態度，道徳意識，恥意識などとどのような関係にあるのか検討する。そのため，まず，われわれがこれまで行ってきた国際比較調査の枠組みの中で検討する。

2. 方法

1）被験者

われわれの行った，最も新しい国際比較調査は，2001－2002にかけて実施した日本，アメリカ，トルコの三カ国のものである。対象者は表1のとおり，生徒と父母合わせて5812人である。ここでは，親の結果はとりあげないが，参考のため表に加えてある。中学・高校生の対象者だけだと2459名である。

表1　調査の対象国と対象者数（人）

	日　本	アメリカ	トルコ	合　計
中学生	706	240	260	1206
高校生	700	303	250	1253
小　計	1406	543	510	2459
父　親	895	219	443	1557
母　親	1089	254	453	1796

日本の調査地点は東京，千葉，茨城，青森である。完全に公平なサンプリングではないが，都会と地方，公立と私立を選んで，なるべく偏りのない中学，高校生の，それぞれ2年生を対象としている。アメリカはニューヨーク州とモンタナ州，トルコはイスタンブールとダータネル海峡に面した小都市チャナッカレというように，外国でも都会と地方都市を対象としている。

これらの被験者を対象とした調査結果の一部分については，松井（2003）および中里・松井（2003）においても報告している。

2）調査内容

今回実施した調査では93の質問からなる，質問紙調査をしている。この論文では，そのうち以下の項目群から社会的迷惑行為およびこれと関連すると思われる項目を選んで分析した。

1）重い非行に対する許容性；重い非行に関する項目は，「ちょっとしたものを万引」，「人のものを盗む」，「ケンかをしてケガをさせる」，「覚せい剤などの薬物を使う」の5項目である。「悪い」かどうか，4段階の選択肢で聞いている。

2）軽い非行に対する許容性；軽い非行に関する項目は，「タバコを吸う」，「酒を飲む」，「エッチな雑誌やアダルトビデオを見る」，「夜遅くまで外で遊ぶ」，「学校をさぼる」，「異性の友達と二人で泊まる」の6項目である。「悪い」かどうか，4段階で聞いている。

3）道徳意識；道徳意識は「人にウソをつく」，「人を困らせる」，「困っている人を助けない」，

「自分勝手にふるまう」,「公園の花をおる」,「親のいうことをきかない」,「友達との約束を破る」,「学校の先生のいうことを聞かない」,「バスの中で2人分の席を占領して座る」,「かんだガムを美地畑に捨てる」の10項目である。「よくないこと」かどうか4段階で聞いている。

4）恥意識;「道ばたへゴミを捨ててしまったとき」など，12の場面で「恥ずかしい」かどうか4段階で聞いている。

以上についての項目は表2－4のとおりである。

2. 結果と考察

1）社会的迷惑行為と関連概念との因子構造

まず，社会的迷惑行為に対する態度が，非行的態度，道徳意識，恥意識などとどのような関係にあるのか検討するために国別に因子分析を行った。方法は，主因子解，バリマックス回転である。

日本は，表2のように7因子で単純構造と判断した。

第1因子は『軽い非行』の因子である。第2因子は，親や先生からしかられたときに「恥ずかしい」という他者の眼を意識した『他律的な恥』の因子である。第3因子は，対人関係にかかわる『道徳意識』の因子である。第4因子は自分の失敗や無能に対する恥意識が含まれており,『自律的な恥』の因子である。この因子には，社会的迷惑行為といえる項目が多く含まれている。このことから，日本では，社会的迷惑行為は，恥の意識と近い関係にあるといえる。第5因子は重い非行に関する因子である。第6因子は『他人と違うことに対する恥』の因子である。第7因子はちょっと迷惑な『社会的迷惑行為』の因子である。これらの項目の選択肢は，やはり社会的迷惑行為の項目を含む，第4因子とは異なり,「悪い」である。

アメリカは，表3のように6因子で単純構造と判断した。

第1因子は『非行』の因子である。アメリカでは，軽い非行も重い非行も同じ因子に含まれることが特徴である。第2因子は，日本と同様，しかられたときに「恥ずかしい」という,『他律的な恥』の因子である。日本と異なるのは,「列に割り込み」,「病院で大声」,「道にゴミ」などの，社会的迷惑行為が他律的な恥の因子に含まれることである。第3因子は，日本と同様『道徳意識』の因子である。この因子には，社会的迷惑行為の項目を多く含む。アメリカでは，社会的迷惑行為は,「悪い」という意識と近い関係にある。第4因子は『他人と違うことに対する恥』の因子である。これは，日本の第6因子に対応する。第5因子はちょっと迷惑な『社会的迷惑行為』の因子である。これは，日本の第7因子に対応する。第6因子は自分の失敗や

表2　日本の道徳意識，非行許容性，恥意識の因子分析結果

	因子						
	1	2	3	4	5	6	7
酒を飲む	.791						
エッチな雑誌やアダルトビデオを見る	.705						
異性の友達と二人で泊まる	.703						
夜遅くまで外で遊ぶ	.696						
タバコを吸う	.628						
学校をさぼる	.601						
友達と遊んで夜遅く帰って、親にしかられたとき		.669					
親に口答えをしてしかられたとき		.661					
友達とけんかをして先生にしかられたとき		.585					
学校に遅刻してきて先生にしかられたとき		.574					
家の手伝いをしないで親にしかられたとき		.557					
授業中にさわいで先生にしかられたとき		.546					
人を困らせること			.619				
人にウソをつくこと			.590				
困っている人を助けないこと			.495				
友達との約束を破ること			.493				
自分かってにふるまうこと			.466				
公園の花をおること			.418				
親のいうことをきかないこと			.408				
道ばたにゴミを捨ててしまったとき				.570			
自分の意見をみんなにはっきり言えなかったとき				.540			
自分で立てた目標が達せられなかったとき				.509			
静かな病院の中で大声で話しをしてしまったとき				.473			
道徳にはずれたことをしてしまったとき				.461			
人の物を盗む					.777		
ちょっとしたものを万引きする					.700		
覚醒剤などの薬物を使う					.437		
みんなが知っていることを自分だけ知らなかったとき						.621	
自分だけみんなと違うことをしてしまったとき						.583	
誰もが持っている流行の品物を持っていないとき						.547	
かんだガムを道ばたに捨てること							.546
バスの中で２人分の座席を占領して座ること							.502
因子寄与率	10.31	8.77	6.04	5.27	4.79	4.49	3.68
累積寄与率	10.31	19.08	25.12	30.39	35.18	39.67	43.36

表3　アメリカの道徳意識，非行許容性，恥意識の因子分析結果

	因子					
	1	2	3	4	5	6
酒を飲む	.794					
タバコを吸う	.711					
異性の友達と二人で泊まる	.641					
ちょっとしたものを万引きする	.603					
学校をさぼる	.593					
覚醒剤などの薬物を使う	.554					
エッチな雑誌やアダルトビデオを見る	.530					
ケンカをして怪我をさせる	.467					
授業中にさわいで先生にしかられたとき		.730				
友達とけんかをして先生にしかられたとき		.663				
学校に遅刻してきて先生にしかられたとき		.660				
友達と遊んで夜遅く帰って、親にしかられたとき		.539				
親に口答えをしてしかられたとき		.504				
並んでいる列に知らずに割り込んでしまったとき		.471				
家の手伝いをしないで親にしかられたとき		.461				
静かな病院の中で大声で話しをしてしまったとき		.427				
道ばたにゴミを捨ててしまったとき		.414				
自分かってにふるまうこと			.615			
困っている人を助けないこと			.610			
公園の花をおること			.588			
友達との約束を破ること			.586			
人にウソをつくこと			.545			
人を困らせること			.524			
学校の先生のいうことをきかないこと			.462			
人の物を盗む	.426		−.452			
親のいうことをきかないこと			.441			
自分だけみんなと違うことをしてしまったとき				.685		
誰もが持っている流行の品物を持っていないとき				.656		
みんなが知っていることを自分だけ知らなかったとき				.462		
バスの中で2人分の座席を占領して座ること					.618	
かんだガムを道ばたに捨てること					.559	
自分で立てた目標が達せられなかったとき						.560
道徳にはずれたことをしてしまったとき						.476
因子寄与率	10.80	9.80	8.88	4.37	4.14	3.28
累積寄与率	10.80	20.60	29.48	33.85	37.99	41.26

表4　トルコの道徳意識，非行許容性，恥意識の因子分析結果

	因子					
	1	2	3	4	5	6
友達と遊んで夜遅く帰って、親にしかられたとき	.696					
親に口答えをしてしかられたとき	.666					
授業中にさわいで先生にしかられたとき	.595					
友達とけんかをして先生にしかられたとき	.568					
家の手伝いをしないで親にしかられたとき	.559					
道徳にはずれたことをしてしまったとき	.557					
学校に遅刻してきて先生にしかられたとき	.487					
自分で立てた目標が達せられなかったとき	.487					
静かな病院の中で大声で話しをしてしまったとき	.480					.415
自分かってにふるまうこと		.634				
親のいうことをきかないこと		.622				
友達との約束を破ること		.598				
人を困らせること		.561				
公園の花をおること		.489				
学校の先生のいうことをきかないこと		.452				
困っている人を助けないこと		.440				
人にウソをつくこと		.433				
バスの中で２人分の座席を占領して座ること		.419				
エッチな雑誌やアダルトビデオを見る			.681			
酒を飲む			.633			
夜遅くまで外で遊ぶ			.619			
タバコを吸う			.570			
異性の友達と二人で泊まる			.567			
学校をさぼる			.466			
人の物を盗む				.760		
覚醒剤などの薬物を使う				.745		
ちょっとしたものを万引きする				.685		
ケンカをして怪我をさせる				.453		
自分の意見をみんなにはっきり言えなかったとき					.571	
自分だけみんなと違うことをしてしまったとき					.504	
みんなが知っていることを自分だけ知らなかったとき					.451	
テストで自分一人だけ高い点数をとったとき					.402	
かんだガムを道ばたに捨てること						.518
道ばたにゴミを捨ててしまったとき	.427					.490
因子寄与率	10.32	8.78	7.26	5.64	4.15	3.53
累積寄与率	10.32	19.10	26.36	32.00	36.15	39.68

無能に対する恥意識が含まれており，『自律的な恥』の因子である。これは，日本の第4因子に対応する。しかし，日本とは異なり，社会的迷惑行為といえる項目はふくまれていない。

トルコは，表4のように6因子で単純構造と判断した。

第1因子は親や先生からしかられたときに「恥ずかしい」という，『他律的な恥』の因子である。トルコではこの因子に，「目標を達成できない」という，自律的な恥や，「病院で大声」のような社会的迷惑行為も含まれる。第2因子は，対人関係にかかわる『道徳意識』の因子である。トルコではこの因子に「公園の花」や，「バスの席」などの社会的迷惑行為が含まれる。第3因子は，『軽い非行』の因子である。第4因子は重い非行に関する因子である。第5因子は『他人と違うことに対する恥』の因子である。第6因子はちょっと迷惑な『社会的迷惑行為』の因子である。これらの項目の選択肢は，やはり社会的迷惑行為の項目を含む，第4因子とは異なり，「悪い」である。

因子分析の結果は，社会的迷惑行為に対する中高生の意識は，非行許容性，道徳意識，恥意識と同一の意識ではなく，これらからある程度独立した意識であることを示していた。ただ，社会的迷惑行為に対する意識は，道徳意識や恥意識から独立しているともいえない。日本では自律的な恥意識と，アメリカでは道徳意識と関係が深いようだ。言い換えれば，前者は「恥ずかしい」ということと，後者では「悪い」ということと関係がある。トルコは社会的迷惑行為は道徳意識，恥意識の両者と関係がある。

他方，日本とアメリカでは「かんだガム」と「バスの席」は他の社会的迷惑行為とは少し違う行為と思われているようである。

2）社会的迷惑行為に対する態度の国際比較

社会的迷惑行為に対する態度を3カ国の間で比較する。表5の6種の社会的迷惑行為を選んだ。質問紙においては，前3者は「悪い」かどうかという道徳意識の項目，後3者は「恥ずかしい」かどうかという恥意識の項目である。

三カ国の中で，アメリカの中高生は社会的迷惑行為についてもっともブレーキが少ない。反対にトルコはもっとも抑制的で，「悪い」または「恥ずかしい」と感じる傾向がある。日本の中高生は，「公園の花」について最も「悪い」と感じ，「病院で大声」，「列に割り込み」でトルコと並んで「恥ずかしい」と感じている。他方，日本の中高生は「道ばたにゴミ」では最も「恥ずかしくない」と答えている。

このように，社会的迷惑行為についての態度には国による違いがあり，日本はアメリカと比べると，社会的迷惑行為に厳しいがトルコほどではない。また，社会的迷惑行為の種類によっ

表5　社会的迷惑行為の3カ国比較

		N	Mean	SD	F	Significance
	(1.非常によくない—4．あまり悪いことと思わない)					
バスの中で2人分の座席を占領して座ること	日本	1394	2.15	0.96	505.74	.000
	米国	540	3.53	0.78		米>日>ト
	トルコ	499	2.00	0.92		
	Total	2433	2.43	1.09		
かんだガムを道ばたに捨てること	日本	1400	2.07	1.00	592.77	.000
	米国	542	3.58	0.77		米>日>ト
	トルコ	500	1.88	0.92		
	Total	2442	2.37	1.14		
公園の花をおること	日本	1399	2.09	0.91	239.49	.000
	米国	540	2.96	1.00		米・ト>日
	トルコ	494	2.86	0.88		
	Total	2433	2.44	1.01		
	(1．恥ずかしい－4．恥ずかしくない)					
静かな病院の中で大声で話しをしてしまったとき	日本	1298	1.92	0.87	83.55	.000
	米国	527	2.46	0.92		米>ト・日
	トルコ	466	1.86	0.80		
	Total	2291	2.03	0.90		
並んでいる列に知らずに割り込んでしまったとき	日本	1298	2.10	0.88	146.87	.000
	米国	529	2.87	0.91		米>ト・日
	トルコ	466	2.20	0.83		
	Total	2293	2.30	0.93		
道ばたにゴミを捨ててしまったとき	日本	1293	2.70	0.95	62.18	.000
	米国	531	2.65	0.95		日・米>ト
	トルコ	461	2.15	0.81		
	Total	2285	2.58	0.95		

ても3カ国で態度が違い，日本は「公園の花を折る」ことには「悪い」と感じるが，「道にゴミを捨てる」ことについては「恥ずかしい」と思わない傾向がある。

Ⅲ．調　査2．3)

1．目的

社会的迷惑行為に対する態度について，日本の中学生，大学生の被験者について検討する。検討内容は，1．社会的迷惑行為の分類，2．社会的迷惑行為の各々についての態度の違い，

3. 中学生と大学生の比較，である。

2. 方法

1）被験者

鹿児島県の中学校，1年生，2年生164名。東京都の私立大学3，4年生165名，合計329名。

2）調査方法

教室での質問紙調査。2003年7月に実施。

3）調査内容

社会的迷惑行為についての，恥意識と経験について各々6項目（質問項目は表6参照）。なお，本調査では他にも質問をしているが，ここでは分析しない。

3. 結果と考察

1）社会的迷惑行為の因子構造

社会的迷惑行為についての経験と恥意識について因子分析を行った（主因子解，バリマックス回転）。結果は表6のとおり，3因子の構造となった。経験と恥意識についての質問項目をともに分析したため，恥の因子と経験の因子に分かれた。しかし，同じ経験の項目でも電車やバスの中で携帯を使ったり，化粧をする行為は他の社会的迷惑行為とは違う因子となった。こ

表6　社会的迷惑行為の因子構造

	1	2	3
近くにゴミ箱が見あたらないのでポイ捨てする（経験）	.645		
混んでいる店内で隣の席に荷物を置いて座る（経験）	.625		
駅の構内やコンビニの前で地べたに座る（経験）	.617		
むしゃくしゃして公共の物を壊したり傷つけたりする（経験）	.509		
道ばたにゴミを捨てる（恥）	−.466	.460	
電車の中で携帯電話を使用する（恥）	−.458		
病院の中で大声で話をする（恥）		.670	
公共の場で大声で騒ぐ（恥）		.592	
電車でヘッドフォンを大きな音で聞く（恥）		.568	
並んでいる列に知らずに割り込む（恥）		.546	
電車やバスの中で携帯電話を使って話す（経験）			.662
電車やバスの中で化粧をする（経験）			.402
寄与率	15.80	12.32	9.96
累積寄与率	15.80	28.13	38.09

れらの行為は，いかにも迷惑度が低いと感じられる行為である。そのため，他とは違う因子となったと思われる。また，経験と恥意識の項目は第一因子で一部まとまっている。そして，恥の項目は因子負荷量が－である。つまり，このことは，恥と感じると，そのような行為はしない傾向があるということを示している。

2）社会的迷惑行為の経験と恥意識

社会的迷惑行為の各々に対する，経験と恥意識を表7に，中学生と大学生別に示す。

経験について中学生のほうが「よくやる」という傾向が有意に強いのは，「地べたに座る」，「隣の席に荷物」，「公共物を壊す」，「ゴミのポイ捨て」である。特に，「ゴミのポイ捨て」を中学生はよくやるようだ。

表7　社会的迷惑行為の経験，恥意識，中学生と大学生の比較

	大中	N	平均値	標準偏差	t 値	P
	（1.よくやる―4. まったくやらない）					
電車やバスの中で携帯電話を使って話す（経験）	中学	164	3.52	0.94	3.99	.000
	大学	165	3.11	0.92		
電車やバスの中で化粧をする（経験）	中学	164	3.89	0.48	3.46	.001
	大学	164	3.63	0.81		
駅の構内やコンビニの前で地べたに座る（経験）	中学	164	3.32	1.03	3.43	.001
	大学	165	3.67	0.76		
混んでいる店内で隣の席に荷物を置いて座る（経験）	中学	164	3.37	1.02	4.63	.000
	大学	165	3.79	0.54		
むしゃくしゃして公共の物を壊したり傷つけたりする（経験）	中学	164	3.55	0.81	4.19	.000
	大学	165	3.85	0.47		
近くにゴミ箱が見あたらないのでポイ捨てする（経験）	中学	164	2.94	1.14	5.77	.000
	大学	165	3.56	0.78		
	（1. 恥ずかしい－4. 恥ずかしくない）					
電車の中で携帯電話を使用する（恥）	中学	164	2.59	1.07	4.66	.000
	大学	162	2.09	0.88		
公共の場で大声で騒ぐ（恥）	中学	163	2.03	1.09	0.74	.463
	大学	163	1.95	0.85		
道ばたにゴミを捨てる（恥）	中学	164	2.42	1.18	6.53	.000
	大学	162	1.67	0.87		
電車でヘッドフォンを大きな音で聞く（恥）	中学	163	2.20	1.15	0.47	.641
	大学	163	2.25	0.98		
病院の中で大声で話をする（恥）	中学	164	1.49	0.71	2.39	.018
	大学	163	1.69	0.75		
並んでいる列に知らずに割り込む（恥）	中学	164	2.06	1.04	3.79	.000
	大学	163	1.69	0.72		

大学生のほうが「よくやる」のは「電車の中での携帯」と「化粧」である。携帯電話の使用と，化粧をすることは，どのような場所でももともと中学生の頻度は低い。それゆえ，トータルでみると，中学生のほうが大学生より社会的迷惑行為をすることが多いといえるだろう。

恥意識について，中学生のほうが大学生より強く「恥ずかしい」と感じる行為は，「病院で大声」である。大学生のほうが「恥ずかしい」というのは，「電車で携帯」，「道ばたにゴミ」，「列に割り込み」である。とくに，「道ばたにゴミ」を大学生はかなり恥ずかしい行為と考えているのに対して，中学生はそう思っていない。

以上のように，社会的迷惑行為について中学生は大学生よりも，実際にそのような行為をすることが多く，また，そのような行為について恥意識が弱い。

このことは，社会的迷惑行為について中学生が，行動面でも意識面でも問題があることを示している。と同時に，社会的迷惑行為を抑制するものとして恥意識が重要であるということを示していると考える。

Ⅳ．考　　察

社会的迷惑行為について，以下のように調査を行った。

調査Ⅰでは，日本，アメリカ，トルコの３カ国の中高生を対象にした調査を行った。調査内容について，非行許容性，道徳意識，恥意識などを含めた因子分析を行った結果，社会的迷惑行為に対する中高生の意識は，非行許容性，道徳意識，恥意識と同一の意識ではなく，これらからある程度独立した意識であることを示していた。

ただ，社会的迷惑行為に対する意識は，道徳意識や恥意識から独立しているともいえない。日本では自律的な恥意識と，アメリカでは道徳意識と関係が深いようだ。言い換えれば，前者は「恥ずかしい」ということと，後者では「悪い」ということと関係がある。トルコでは，社会的迷惑行為は道徳意識，恥意識の両者と関係がある。

また，日本とアメリカでは「かんだガム」と「バスの席」は他の社会的迷惑行為とは少し違う行為と思われているようである。このように，社会的迷惑行為と一口にいっても，行為の種類や状況，迷惑の程度などから，いくつかの種類にわかれる可能性がある。

社会的迷惑行為に対する態度を３カ国の間で比較すると，三カ国の中で，アメリカの中高生は社会的迷惑行為についてもっとも，「悪い」，「恥ずかしい」と感じるブレーキが弱い。反対にトルコはもっとも抑制的で，多くの社会的迷惑行為を「悪い」または「恥ずかしい」と感じる傾向がある。日本の中高生は，アメリカと比べると，社会的迷惑行為に厳しいが，トルコほ

どではない。また，日本は「公園の花を折る」ことには「悪い」と感じるが，「道にゴミを捨てる」ことについては「恥ずかしい」と思わない傾向がある。

このように，社会的迷惑行為についての態度には国による違いがある。

調査Ⅱでは，まず，社会的迷惑行為についての経験と恥意識について因子分析を行った。結果は3因子の構造となった。経験と恥意識についての質問項目をともに分析したため，恥の因子と経験の因子に分かれた。しかし，同じ経験の項目でも電車やバスの中で携帯を使ったり化粧をする行為は他の社会的迷惑行為とは違う因子となった。これらの行為は，いかにも迷惑度が低いと感じられる行為である。そのため，他とは違う因子となったと思われる。つまり，社会的迷惑行為はいくつかの種類に分けることができるということを示唆している。また，経験と恥意識という，回答の質の異なる項目が第一因子で一部まとまっており，恥の項目のみは因子負荷量が－である。つまり，恥と感じると，そのようなことはしないということ，恥の意識が社会的迷惑行為を抑制し得るということを示している。

社会的迷惑行為について中学生は大学生よりも，実際にそのような行為をすることが多く，また，そのような行為について恥意識が弱い。

このことは，社会的迷惑行為について中学生が，行動面でも意識面でも問題があることを示している。と同時に，社会的迷惑行為を抑制するものとして，やはり，恥意識が重要であるということを示していると考える。

V．文　献

石田靖彦，吉田俊和，藤田達雄，廣岡秀一，斎藤和志，森久美子，安藤直樹，北折充隆，元吉忠寛，2000，「社会的迷惑に関する研究（1）迷惑認知の根拠に関する分析」，『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要』第47巻，25－33.

松井　洋　1991，「青年期における愛他行動の発達とその規定因」，『川村学園女子大学研究紀要』第2巻 181・193.

松井　洋・中里至正・加藤義明・瀬尾直久・石井隆之　1995「愛他性の構造に関する国際比較研究」『日本心理学会第59回大会発表論文集』，173.

松井　洋　1997，「愛他性に関する国際比較研究―米国，中国，韓国，トルコ，日本の中学生・高校生を対象として―」『川村学園女子大学研究紀要』第8巻　第1号，147－165.

松井　洋　1998「中学・高校生の思いやり意識―日本・中国・韓国・アメリカ・トルコの学生・高校生を対象として―」，『川村学園女子大学研究紀要』第8巻　第1号，147－165.

松井　洋・中里至正・石井隆之，1998，「愛他性の構造に関する国際比較研究」，『社会心理学研究』，第13巻，2号，133－142.

松井　洋　1998，「中学・高校生の思いやり意識―日本・中国・韓国・アメリカ・トルコの愛他性の国際比較研究―」，Health Sciences, vol. 14, no. 2, 45－55，日本健康科学学会.

松井　洋　1998,「愛他性に関する国際比較研究・―日本，中国，韓国，アメリカ，トルコ，キプロス，ポーランドの中学生・高校生を対象として―」,『川村学園女子大学研究紀要』第9巻　第1号，175・186.

松井　洋　1999,「日本の中学生・高校生の価値観に関する研究―日本，アメリカ，中国，韓国，トルコ，キプロス，ポーランドとの国際比較研究―」,『川村学園女子大学研究紀要』第10巻.

松井　洋，2000,「日本の若者のどこがへんなのか―中学生・高校生の国際比較から―」,『川村学園女子大学研究紀要』，第11巻，第1号，101－114.

松井　洋・中里至正・石井隆之，2000,「中学生の親子の心理的距離」,『日本心理学会第64会大会論文集』，190.

松井　洋，2001,「日本の中学生の親子関係」,『川村学園女子大学研究紀要』，第12巻，第1号，101－114.

松井　洋，2002,「日本の中学生の親子関係と非行的態度」,『川村学園女子大学研究紀要』，第13巻，第1号，105－119.

松井　洋，2003,「親子関係と子どもの道徳性―日本，アメリカ，トルコの中高生の比較―」，川村学園女子大学研究紀要，第14巻，第1号，85－99.

Nakasato, Y. & Matstui, H., 1993 Altruistic Attitudes of Japanese Youths. International Journal of Psychology, vol. 27, pp. 562.

Nakasato, Y. & Matstui, H., 1996 A Structure of Altruistic Attitudes -A Comparison of American, Chinese, Korean, Terkish and Japanese Youths-. International Journal of Psychology, vol. 28, pp. 48.

中里至正・加藤義明・杉山憲司・松井　洋・瀬尾直久　1992,「非行抑止要因の文化差に関する研究・日本・韓国・米国・中国の高校生を対象として」,（財）日工組調査研究財団　委託研究報告書.

中里至正・松井　洋（編著），1997『異質な日本の若者たち』，ブレーン出版.

中里至正・松井　洋　1999『日本の若者の弱点』，毎日新聞社.

中里至正・松井　洋　2003『日本の親の弱点』，毎日新聞社.

吉田俊和，安藤直樹，元吉忠寛，藤田達雄，廣岡秀一，斎藤和志，森久美子，石田靖彦，北折充隆，1999,「社会的迷惑に関する研究（1）」,『名古屋大学教育学部紀要』第46巻　53－74.

1）本論文は，本学心理学科中村　真，東洋大学中里至正，永房典之，産能大学堀内勝夫との恥，道徳性についての一連の共同研究の成果の一部をまとめたものである。

2）本研究は，平成13－15年度　科学研究費補助金（基盤C）「社会的迷惑行為の抑制要因と恥意識の関係」，研究代表者　松井　洋，課題番号13610161の補助を受けた。

3）調査Ⅱの実施は東洋大学永房典之氏が主に行った。本論はその一部である。同氏に感謝する。